

戦国時代の茶筌

歴史上、最初に茶筌について記載されているのは「大観茶論」（1107年）である。

「筌(せん) 茶筌は筋竹の老(か)れたものでつくる。身(ぢく)は厚くて重いものがよく、筌(さき)は疎(まば)らで勁(つよ)いのがよい。本(もと)が強くて末(すえ)が必ず眇(ほそ)いのは、ちょうど瘦(ほそ)い劍(けん)のようである。おそらく身が厚く重いと、操(つか)うとき力がはいつて運用(うご)かし易い。筌が疎(まば)らで勁(つよ)く劍(けん)の背(せ)のようであれば、撃拂(かきまわ)しかたが過ぎてても浮いた沫(あわ)が生(な)じない。」

また、図としては『茶具図賛』（1269年）である。（下図）



本蓮御坊

(折返)

(折紙) 大丈二条、小丈四条、屏風一雙、鉢背共燈箋二本、□んさう一たは、い二、すミとり一、ちやせんちやとう円座二、提子一、ひさけ一、是等具足奉返上候、

稱念



茶筌（慕帰絵詞（部分）：1351年）
西本願寺蔵

- 日本における茶筌の初見は、弘安年間（1278～1287）。（鎌倉遺文 ○一六六一二）